

『雪の翼（本朝食人種）』

泉鏡花作

全一章

柏崎 海軍少尉の夫人に、民子といつて、一昨年  
故郷なる、福井で結婚の式をあげて、佐世保に移住  
んだのが、今度少尉が出征に就き、親里の福井に歸  
り、神佛を祈り、影膳据ゑつゝ座にある如く、家を  
守つて居るのがあつた。

旅順の吉報傳はるとゝもに幾干の猛將 勇士、或  
は士卒 一 或は傷つき骨も皮も散々に、影も留  
めぬさへある中に夫は天晴の功名して、唯纒に左の  
手に微傷を受けたばかりと聞いた時、且つ其の乗組  
んだ艦の帆柱に、夕陽の光を浴びて、一羽雪の如き  
鷹の來り留つた報を受け取つた時、連添ふ身の民子  
は如何に感じたらう。あはれ新婚の式を擧げて、一  
年の衾暖かならず、戦地向つて出立つた折には、  
忍んで泣かなかつたのも、嬉涙に暮れたのであつた。

あゝ、其のよるこびの涙も、夜は片敷いて帯も解  
かぬ留守の袖に乾きもあへず、飛報は鎮守府の病院  
より、一家の魂を消しに來た。

少尉が病んで、豫後不良とのことである。

此の急信は××年××月××日、午後三時に届い  
たので、民子は蒼なつて衝と立つと、不斷着に繻子  
の帯引しめて、つか／＼と玄關へ。父親が佛壇に御  
明を點ずる間に、母親は、財布の紐を結へながら、  
駈けて出て之を懷中に入れさせる、女中がシヨオル  
をきせかける、隣の女房が、急いで腕車を仕立に行  
く、とかうする内、お供に立つべき彌曾平といふ親  
仁、身支度をするといふ始末。さて、取るものも取  
りあへず福井の市を出發した。これが鎮守府の病院  
に、夫を見舞ふ首途であつた。

冬の日の、山國の、名にしおふ越路なり、其日は  
空も曇りたれば、漸く町をはづれると、九頭龍川の  
川面に、早や夕暮の色を籠めて、暗くなりゆく水蒼  
く、早瀬亂れて鳴る音も、千々に碎けて立つ波も、

雪や！ 其の雪の思ひ遣らるゝ空模様。 近江の國へ  
山越に、出づるまでには、中の河内、木の芽峠が、  
尤も近きは目の前に、春日野峠を控へたれば、頂の  
雲眉を蔽うて、道のほど五里あまり、武生の宿に着  
いた頃、日はとつぷりと暮れ果てた。

長旅は抱へたり、前に峠を望んだれば、夜を籠め  
てなど思ひも寄らず、柳屋といふに宿を取る。

路すがら手も足も冷え凍り、火鉢の上へ突伏して  
も、身ぶるひやまぬ寒さであつたが、

枕に就いて初夜過ぐる頃ほひより、少し氣候がゆ  
るんだと思ふと、凡そ手の掌ほどあらうといふ、俗  
に牡丹となづくる雪が、しと／＼と果しもあらず降  
出して、夜中頃には武生の町を笠のやうに押被せた、  
御嶽といふ一座の峰、根こそぎ一揺れ、揺れたかと  
思ふ氣勢がして、風さへ颯と吹き添つた。

一の谷、二の谷、三の谷、四の谷かけて、山々  
峰々縦横に、荒れに荒るゝが手に取るやう、大波の  
寄せては返すに齊しく、此の一夜に北國空にあらゆ

る雪を、震ひ落すこと、凄まじい。

民子は一炊の夢も結ばず。あけ方に風は凪いだ。

昨夜雇つた腕車が二臺、雪の門を叩いたので、主  
従は、朝餉の支度も勿々に、身ごしらへして、戸外  
に出ると、東雲の色とも分かす黄昏の空とも見えす、  
溟々濛々として、天地唯一白。

不意に積つた雪なれば、雪車と申しても間に合ず、  
ともかくもお車を。帳場から此處へ参る内も、此の  
通りの大汗と、四人の車夫は口を揃へ、精一杯、後  
押で、お供はいたして見まするけれども、前途のお  
請合はいたされず。何はしかれ車の齒の埋まります  
まで、遣るとしませう。其の上は、三人がより五人  
がより、三井寺の鐘をかつぐ力づくでは、とても一  
寸も動きはしませぬ。お約束なれば當柳屋の顔立に  
参つたまで、と、しり込すること一方ならず。唯急  
ぎに急がれて、こゝに心なき主従よりも、御機嫌よ  
うと門に立つて、一曳ひけば降る雪に、母衣の形も  
早や隠れて、殷々として沈み行く客を見送る宿のも

のが、却つて心細い限りであつた。

酒代は惜まぬ客人なり、然も美人を載せたれば、  
屈竟の壮佼勇をなし、曳々聲を懸け合はせ、嘖、畦  
道、村の徑、揉みに揉んで、三里の路に八九時間、  
正午といふのに、峠の麓、春日野村に着いたので、  
先づ一軒の茶店に休んで、一行は吻と呼吸。

茶店のものも爐を圍んで、ぼんやりとして居るばかり。いふまでもなく極月かけて三月 彼岸の雪どけまでは、毎年こんな中に起伏するから、雪を驚くやうな者は忘れても無い土地柄ながら、今年は意外に早い上に、今時恁くまで積るべしとは、七八十年つた老人も思ひ懸けないのであつたと謂ふから。

来る道でも、村を抜けて、藪の前など通る折は、  
兩側から倒れ伏して、竹も三尺の雪を被いで、或は  
五間、或は十間、恰も眞綿の隧道のやうであつたを、  
手で拂ひ笠で拂ひ、辛うじて腕車を潜らしたれば、  
網の目にかゝつたやうに、彼方此方を、雀がばら／＼、  
洞の蝙蝠の居るやうだつた、と車夫同士語りな

どして、しばらく澁茶しぶちやに市いちが榮さかえる。

聲こゑの中なかに噫あつと一聲ひとこゑ、床几しやうぎから轉ころげ落おちさう、脾腹ひばらを抱かへて呻うめいたのは、民子たみこが供ともの彌曾平親仁よそへいおやぢ。

這こは便びんなし、心しんを冷ひやした老おいの癩しやく、其その惱輕なやみかろからず。

一體誰彼たいたれかれといふ中うちに、さし急いそいだ旅たびなれば、註文ちうもんは間まに合あはず、殊ことに少わかい婦人をんななり。うっかりしたものも連つれられねば、供ともさして遣やられもせぬ。彌曾平よそへいは、三十年餘みそとせあまりも律儀りちぎに事つかへて、飼殺かひころしのやうにして置おく者の氣質きだては知しれたり、今いまの世よの道中だうちうに、雲助くもすけ、白波しらなみの恐おそれななど、あるべくも思おもはれねば、力ちからはなくても怪けしうはあらず、最もつとも便たよりよきは年としこそ取とつたれ、大根だいこんも引ひく、屋根やねも葺ふく、水みづも汲くめば米こめも搗つく、達たつ者しゃなればと、この老僕おやぢを擇えらんだのが、大おほいなる過失くわしつになつた。

いかに息災そくさいでも既すでに五十九ごじゅうきゅう、あけて六十ろくじゅうにならうといふのが、内うちでこそはくる／＼廻まはれ、近頃ちかごろは遠路とほみちの要えうもなく、父親ちちおやが本ほんを見る、炬燵こたつの端はしを拝借はいしやくし、

母親はやおやが看經かんきんするうしろから、如來にょらい様さまを拜をがむ身分みぶん血ちの氣けの少すくないのか、とやかくと、心遣こころづかひに胸むねを騒さわがせ、寒さむさに骨ほねを冷ひやしたれば、忘わすれて居ゐた持病ぢびやうがこゝで、生憎あいにく此時このとき。

雪ゆきは小止をやみもなく降ふるのである、見みる／＼内うちに積つもるのである。

大勢おほぜいが寄よつて集たかり、民子たみこは取とり絶すがるやうにして、介かい抱ほうするにも、藥くすりにも、ありあはせの熊膽くまのあくらゐ位ゐ、其それでも心こころは通つうじたか、少すこしは落おちつ着ついたから一刻こくも疾はやくと、再ふたゝび腕車くるまを立てようとするれば、泥除どろよけに嚙かじりつくまでもなく、彌曾平よそへいは腰こしを折をつて、礮はたと倒たふれて、顔かほの色いろも次第しだいに變かはり、之これでは却かへつて足手あしてま絡とひ、一式しきの御恩ごおん報ほうじ、此このお供ともをと思おもひましたに、最もう叶かなはぬ、皆みんなで首くびを縊しめてくれ、奥様おくさま私わしを刺殺さしころして、お心懸こころがかりのないやうに願ねがひます。おのれやれ、死しんで鬼おにとなり、無事ぶじに道中だうちゆうはさせませう、魂たましひが附添つきそつて、と血狂ちくるふばかりに怠あせるはど、弱よわるは老おいの身からだ體たにこそ。

口々くち／＼押宥おしなだめ、民子たみこも切せつに慰なぐさめて、お前まへの病氣びやうきを看み

護ると謂つて此處に足は留められぬ。棄てゝ行くに  
は忍びぬけれども、鎮守府の旦那様が、呼吸のある  
内一目逢ひたい、私の心は察しておくれ、とかうい  
ふ間も心は急ぐ、峠は前に控へて居るし、爺や！

もし奥様。

と土間の端までゐざり出でゝ、膝をついて、手を  
合すのを、振返つて、母衣は下りた。

一臺の腕車二人の車夫は、此の茶店に留まつて、  
人々とゝもに手當をし、些とでもあがきが着いたら、  
早速武生までも其日の内に引返すことにしたのであ  
る。

民子、腕車も二人がかり、それから三里半だらゝ  
のぼりに、中空に聳えたる、春日野峠にさしかゝ  
る。

ものゝ半道とは上らないのに、車の齒の軋り強く、  
平地でさへ、分けて坂、一分間に一寸づゝ、次第に

雪が嵩増すので、呼吸を切つても、もがいても、腕車は一步も進まずなりぬ。

前なるは梶棒を下して坐り、後なるは尻餅ついて、御新造さん、とてもと謂ふ。

大方は恚くあらむと、期したることゝて、民子も豫め覺悟したから、茶店で草鞋を穿いて來たので、此處で母衣から姿を顯し、山路の雪に下立つと、早や其の爪先は白うなる。

下坂は、動が取れると、一名の車夫は空車を曳いて、直ぐに引返す事になり、梶棒を取つて居たのが、旅鞆を一個背負つて、之が路案内で峠まで供をすることになつた。

其の鐵の如き健脚も、雪を踏んではとぼ／＼しながら、前へ立つて足あとを印して上る、民子はあとから傍目も觸らず、攀ぢ上る心細さ。

千山萬岳疊々と、北に走り、西に分れ、南より迫

り、東より襲ふ四圍たゞ高き白妙なり。

さるほどに、山又山、上れば峰は益累り、頂は愈々  
聳えて、見渡せば、見渡せば、此處ばかり日の本を、  
雪が封ずる光景かな。

幸に風が無く、雪路に譬ひ山中でも、然までには  
寒くない、踏しめるに力の入るだけ、却つて汗する  
ばかりであつたが、裾も袂も硬ばるやうに、ぞつと  
寒さが身に迫ると、山々の影がさして、忽ち暮なむ  
とする景色。あはよく峠に戸を鎖した一軒の山家の  
軒に辿り着いた。

さて奥様、目當にいたして參つたは此の小家、悴  
は武生に勞働に行つて居り、留守は山の主のやうな、  
爺と婆二人ぐらし、此處にお泊りとなさいまし、戸  
を叩いてあけさせませう。また彼方此方五六軒立場  
茶屋もござりますが、美しい貴女さま、唯お一人、  
預けまして、安心なは、此の外にござりませぬ。武  
生の富藏が受合ひました、何にしるお泊んなすつて、  
今夜の様子を御覽じまし。此の雪の止むか止まぬかゞ

勝負でござります。もし留みませぬと、逆も路は通  
じません、降やんでくれさへすれば、雪車の出ます  
便宜もあります、御存じでもありませんが、此の邊  
では、雪籠といつて、山の中で一夜の内に、不意に  
雪に會ひますると、時節の來るまで何方へも出られ  
ぬことになりますから、私は稼人、家に四五人も抱  
へて居ります、萬に一つも、もし、然やうな目に逢  
ひますると、媽媽や小兒が顯を釣らねばなりません  
で、此の上お供は出來かねます。お別れといたし  
まして、其處らの茶店をあけさせて、茶碗酒をぎう  
とあふり、其勢で、暗雲に、とんぼを切つて轉げ  
るまでも、今日の内に麓まで歸ります、とこれから  
雪の伏家を叩くと、老人夫婦が出迎へて、富藏に仔  
細を聞くと、お可哀相のいひつゞけ。

行先が案じられて、我にもあらずしよんぼりと、  
門にイんで入りもやらぬ、媚しい最明寺 殿を、手  
を採つて招じ入れて、昇据ゑるやうに圍爐裏の前。

お前まあ些と休んでと、深切にほだされて、懐し  
さうに民子がいふのを、いゝえ、さうしては居られ

ませぬ、お荷物にもつは此處こゝへ、もし御遠慮ごえんりよはござりませぬ、足あしを投出なげだして、裾すその方ほうからお温ぬくもりなされませ、忘れても無理むりな路みちはなされますな。それぢやとつさん頼たのんだぜ、婆ばあさん、いたはつて上げてくんせい。

富藏とみかくさんとやら、といつて、民子たみこは思おもはず涙なみだぐむ。

へい、奥おくさま御機嫌ごきげんよう、へい、又また通りがりにも、お供ともの御病人ごびやうじんに氣きをつけます。あゝ、いかい難なん儀ぎをして、おいでなさるさきの旦那様だんなさまも御大病ごたいびやうさうな、唯ただの時ときなら橋はしの上うへも、欄干らんかんの方ほうは避さけてお通りなさらうのに、おいたはしい。お天道様てんたうさま、何分なにぶんお頼たのみ申まをしますぜ、やあお天道様てんたうさまといや降ふることは／＼。

あとに頼たのむは老人夫婦らうじんふうふ、之これが又また、補陀落山ふだらくさんから假かりにこゝへ、庵いほりを結むすんで、南無大悲なむだいひ民子たみこのために觀世くわんぜ音おん。

其その情なさけで、饑うゑず、凍こえず、然さも安心あんしんして寢床ねどこに入はひることが出で來きた。

侘しさは、食べるものも、着るものも、こゝに斷るまでもない、薄い蒲團も、眞心には暖く、殊に些は便りにならうと、故と佛間の佛壇の前に、枕を置いてくれたのである。

心靜に枕には就いたが、民子は何うして眠られよう、晝の疲勞を覺ゆるにつけても、思ひ遣らるゝ後の旅。

更け行く閨に聲もなく、涼しい目ばかりぱち／＼させて、鐘の音も聞えぬのを、徒に指を折る、寂々とした板戸の外に、ばさりと物音。

民子は樹を、辻つた雪のかたまりであらうと思つた。

しばらくして又ばさりと障つた、恚る時、恚る山家に雪の夜半、此の音に恐氣だつた、婦人氣はどんなであらう。

富藏は疑はないでも、老夫婦の心は分つて居ても、孤家である、この孤家なる言は、昔語にも、お伽話にも、浄瑠璃にも、ものゝ本にも、年紀今年二十に

なるまで、民子の耳に入つた響きに、一ツとして、悲惨悽愴の趣を今爰に囁き告ぐる、材料でないのではない。

呼吸を詰めて、なほ鈴のやうな瞳を凝せば、薄暗い行燈の灯の外、壁も襖も天井も暗でないものはなく、雪に眩めいた目には一しほで、ほのかに白いは我とわが、佛に立つ頬の邊を、確乎とおさへて枕ながら幽にわななく小指であつた。

あなわびし、うたてくもかゝる際に、小用がたしなくなつたのである。

もし。ふるへ聲で又、

もし／＼と、二聲三聲呼んで見たが、目ざとい老人も寐入ばな、分けて、罪も屈託も、山も町も何にもないから、雪の夜に静まり返つて一層寐心の好さうに、鼾も聞えずひっそりして居る。

堪りかねて、民子は密と起き直つたが、世話になる身の遠慮深く、氣味が悪いぐらゐには家のぬし起されず、其まゝ突臥して居たけれども、さてあるべ

きにあらざれば、恐々行燈を引提げて、勝手は寝し  
なに聞いて置いた、縁側について出ようとすると、  
途絶えて居たのが、ばたりと當つて、二三度續けさ  
まにはさ、ばさ、ばさ。

はツと唾をのみ、胸を反して退つたが、やがて思  
切つて用を達して出るまでは、まづ何事もなかつた  
處。

手を洗はうとする時は、民子は殺されると思つた  
のである。

雨戸を一枚つと開けると、直ちに、東西南北へ五  
里十里の眞白な山であるから。

如何なることがあらうも知れずと、目を瞑つて、  
行燈をうしろに差置き、わなゝき／＼柄杓を取つて、  
埋もれた雪を拂ひながら、カチリとあたる水を灌いで、  
投げやるやうに放したトタン、颯とばかり雪をま  
いて、ばつさり飛込んだ一個の怪物。

民子は思はずあツといった。

夫婦はこれに勿起きたが、左右から民子を圍つて、三人六の目を注ぐと、小暗き方に蹲つたのは、何ものかこれ唯一羽の雁なのである。

老人は口をあいて笑ひ、いや珍しくもない、まゝあること、俄の雪に降籠められると、朋に離れ、埒に迷ひ、行方を失ひ、食に饑えて、却つて人に懐き寄る、これは獵師も憐んで、生命を取らず、稗、粟を與へて養ふ習と、仔細を聞けば、所謂窮鳥懐に入つたるもの。

翌日も降り止まず、民子は心も心ならねど、神佛とも思はるゝ老の言に逆らはず、二日三日は宿を重ねた。

其夜の雁も立去らず、餌にかはれた飼鳥のやう、よくなつき、分けて民子に慕ひ寄つて、膳の傍に羽を休めるやうになると、はじめに生命がげ恐しく思ひしだけ、可愛さは一人なり。つれ／＼には名を

呼んで、翼を撫でもし、膝に抱きもし、頬もあて、夜は衾に懷を開いて、暖い玉の乳房の間に嘴を置かせて、すや／＼と寐ることさへあつたが、一夜、凄じき寒威を覺えた。あけると凍てゝ雪車が出る、直に發足。

老人夫婦に別を告げつゝ、民子は雁にも殘惜しいまで不便であつたなごりを惜んだ。

神の使であつたらう、この鳥がないと、民子は夫にも逢へず、其看護も出來ず、且つやがて大尉に昇進した少尉榮を見ることもならず、彌曾平の喜顔にも、再會することが出來なかつたのである。

民子をのせて出た雪車は、路を迂つて、十三谷といふ難所を、大切な客ばかりを千尋の谷底へ振り落した、雪ゆゑ怪我はなかつたが、落込んだのは炭焼の小屋の中。

五助。

權九郎。

といふ、兩名の炭焼が、同一雪籠に會つて封じ込められたやうになり、二日三日は貯蓄もあつたが、四日目から、粟一粒も口にしないで、熊の如き荒漢等、山狗かとはかり瘦せ衰へ、目を光らせて、舌を噛んで、背中合せに倒れたまゝ、唸く聲さへ幽な處、何、人間なりとて容赦すべき。

帯を解き、衣を剥ぎ、板戸の上に縛めた、其のありさまは、こゝに謂ふまい。立處 其の手足を炙るべく、炎々たる炭火を熾して、やがて、猛獸を拒ぐ用意の、山刀と斧を揮つて、あはや、其胸を開かむとなしたる處へ、神の御手の翼を擴げて、其膝、其手、其肩、其脛、狂ひまつはり、搦まつて、民子の膚を蔽つたのは、鳥ながらも心ありけむ、民子の雪車のあとを慕つて、大空を渡つて來た雁であつた。瞬く間に、雁は炭焼に屠られたが、民子は微傷も受けないで、完き壁の泰らかに雪の膚は繩から抜けた。

渠等は敢て鬼ではない、食を得たれば人心地になつて、恰も可し、谷間から、いたはつて、負つて世

に出た。

【完】